

ロレンツォ・デ・メディチと祝祭の「絶対主義」： 15世紀フィレンツェ政治文化に関する一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000991

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ロレンツォ・デ・メデイチと祝祭の「絶対主義」

——一五世紀フィレンツェ政治文化に関する一考察——

石 黒 盛 久

筆者は先に、都市の守護聖人に捧げられた聖ヨハネ祭を、謝肉祭と並ぶその祝祭世界の構造的な中心と捉えつつ、論文「フィレンツェ、一五一四年の聖ヨハネ祭」において、一六世紀初頭フィレンツェの祝祭の諸相に一瞥を加えた¹⁾。研究史上、この二つの行事は市の公的祝祭の精華として、先立つ一五世紀ロレンツォ豪華公の庇護の下、大いに振興されたとされる。例えばアントンフランチェスコ・グラツィーニ(ラスカ)の、「それらは……高貴にして絢爛たる趣向を帯びるものですし、広闊で魅惑に満ちた言葉により織りなされ、華やかで浩然たる音楽を伴うものであります。その声は響きに溢れると共に見事に調和し、伶人の衣装は豪華極まりありません。これらの趣向は金に糸目をつけ

ずに手掛けられ、御道具の類は名人上手の手により創作されると共に、優美類も無き染め付けがなされます。それが用いられる場合、祭りの馬はもつとも優婉なものが選ばれ、馬具の類もまた充分に施されます。そして夜ともなれば、松明行列がその空を焦がす事でしょう」との証言こそ今日に至るまで、豪華公時代頂点を極めた謝肉祭の壮麗、就中謝肉祭の(歌)を核とする仮面行列の壮麗を語る、最良の証言と目されてきた²⁾。加えて、フィレンツェが生んだ二人の偉大な歴史家——マキアヴェッリ(「彼は、その祖国を常に祝祭の雰囲気の内包み込もうとした」)とグイッチャルデーニ(「民衆は毎日、見せ物や祝祭その他諸々の新たななる事柄により楽しむ事が出来た」)——が、豪華公の大御代について語った条が、ラスカのこの記述の権威ある

傍証として引用され続けている。

だがバオラ・ヴェントローネは史料の実証的考察を踏まえ、かかる通説に異議を呈した。彼女は古来、豪華公時代の謝肉祭復元の素材とされてきた、謝肉祭の〈歌〉を除き、その治世におけるロレンツォの謝肉祭、更には聖ヨハネ祭への積極的関与を示す、如何なる証言も見出し得ない事実を、自身の驚愕をもこめて指摘した。中でも彼女が強調するのは、聖ヨハネ祭や謝肉祭挙行の実働部隊としての〈祭り仲間〉の、ロレンツォの政治的組織化する定説を支える、その規制のための政令や財政援助の存廃といった、如何なる史料も存在しなかった点に他ならない。そればかりかヴェントローネは、ロレンツォを謝肉祭や聖ヨハネ祭と結びつける典拠としての、ラスカの『凱旋式、山車、仮面行列或いは〈謝肉祭の歌〉』（二五五九）に納められた数多くの歌―ジャック・ヘーアによればその「各題目と章句の幾つかを読めば、一四八〇年代フィレンツェの謝肉祭が如何なるものであったかを……知る事が出来る」―の大半が実は、一六世紀初頭を遡るものではない事をさえ明らかにしてみせる。ヴェントローネのこの指摘を容受するジヨバンニ・キャッペリに従えば、豪華公時代に属する作品と断言し得るものは、ロレンツォ公自身の詩作―一作品等、

数える程に過ぎない。

ではその同時代性を断言し得る、ロレンツォ自身の一詩作から我々は、彼と当代の都市祝祭との間の、如何なる関連を垣間見る事が出来るであろうか。彼の詩歌の多くが内容的に、所謂〈職人の歌〉に分類される事に、以前から注目が払われてきた。〈焼き菓子売り〉、〈ヴァレンシアの香水売り〉、〈麦菓子作り〉、〈接ぎ木師〉等々といったその主人公達の庶民性を根拠にトレックスラーは、「フィレンツェの歴史において……手労働の社会の正(十)価値的現象としての公的表象は、殆ど前例のない出来事であった」事を強調すると共に、従来中産市民層に支配されてきた伝統的祝祭の場に、彼ら下層民を動員する事を通じて、ロレンツォが一種の、「儀礼革命」をもたらそうと企画していたと説いている。こうした「儀礼革命」の担い手とトレックスラーに想定されたのが、先に触れた聖ヨハネ祭や謝肉祭挙行の実働部隊としての〈祭り仲間〉であった。一六世紀フィレンツェにおける、こうした〈祭り仲間〉を代表する存在として注目されたのが、〈力〉組(ポテンツェ)であった。彼らは聖ヨハネ祭や謝肉祭に際して、後述する〈山車〉をはじめとする仮設建造物の造営に寄与するのみならず、ロレンツォの作詞になるこれら謝肉祭の

《歌》の朗詠によって、仮面行列の中心的担い手となったとトレックスラーは考えている^⑧。

もっとも一六世紀史料に散見する《力》^{ポテンツェ}組ではあるが、その活動を証立てる一五世紀の史料は全く発見されていない。一五世紀、即ちロレンツォ時代に足跡を残した《祭り仲間》として我々に知られるのは寧ろ、マリオタツツォに指導された《星》組の活動だ。彼らの活動についての明白な言及は、有名な一四九〇年の謝肉祭について残された、フィリップ・ダ・ガリアーノの書簡に見出される。それによれば「マリオタツツォの《星》^{ステラ}組は：達人の手になる見事な飾り付けや《創意》を備える、七惑星に捧げた七台の凱旋車を以て、盛大な仮面行列を提供」（二月二〇日付書簡）した^⑨。これと並ぶロレンツォ時代の著名な祝祭、一四九一年の聖ヨハネ祭（エミリウス・パウルス）の凱旋^⑩もまた、「これらはロレンツォ・デ・メデイチにより、提供されたものである」とのトリバルト・ロツシの日記に窺える如く、ロレンツォにより彼らに委嘱されたものだ^⑪。

だが、《祭り仲間》とロレンツォの密着というトレックスラーの主張に対しても、ヴェントローネは真つ向から疑問を投げつける。彼女によれば際前論じた如く、一五世紀における《力》^{ポテンツェ}組の活動は、それを立証する史料を欠き、

また、これをロレンツォ公時代の《星》^{ステラ}組と接合させ、その構成を《力》^{ポテンツェ}組同様に細民（popolo minuto）の集団（ロレンツォ公の認可の下この団体を構成した、職人集団）と捉える、積極的理由も見出せない^⑫。ヴェントローネのかかる主張が豪華公時代の祝祭の復元につき、より慎重な立場を指し示すものである事は勿論である。しかし参照し得る史料の決定的欠乏を踏まえた場合、ある程度の論理的整合性を確保できれば、必ずしも年代学的な厳密さに縛り付けられる必要はないのではないか。即ち、一四九一年の聖ヨハネ祭に関するロツシの証言が暗示する如く、ロレンツォ公「メデイチ家」と《星》組の間に、直接交渉が存在していたばかりか、本論の中心として後に論じられるように、後代の《力》^{ポテンツェ}組と同様この組織を、細民を主体とするものと解する蓋然性が想定され得るのだ。

かかる蓋然性の論拠となるのが、ロレンツォ時代の祝祭と平行しつつ、それを包含する形で展開したメデイチ家の、フィレンツェ支配の政治戦略の方向性に他ならない。だがそれを論じるに先立ち、ヴェントローネがロレンツォ時代の都市祝祭に関する、トレックスラーの完成させた定説に対して行った、もう一つの批判を検討しておこう。それはロレンツォ公が制作したとされる謝肉祭の《歌》の、民衆

的性格に関するものである。ヘーアは〈歌〉を「名にしお
う生業に携わる喜び、良き仕事を成し遂げる誇り」の表明
と受け止め、またこのような〈歌〉の性格付けを前提にト
レックスラーは、〈力〉組の性格を「職人の生業と活動を
称える―豪華公の〈歌〉を路上朗詠しながら、守旧的な組
織「同業組合・同信会・地域自治体」とは異なる祝祭の、
新たな原動力を形成するものと位置づけた¹³。だがヴェン
トローネ「更にはそれと同じ見解を共有するキャツペリヤ
シングルトン」の評価によれば、「仮面でその姿を隠しつ
つ、五月一日の祭礼でお馴染みのご婦人方に身を籠すのが
習いだったからで御座います。このようにご婦人方や少
女達に変装し、人々は踊りながら歌ったのであります」
〈ラスカ〉という、バフチン張りの価値の転倒や、それに伴
うきわどい性的両義性を伴った表現「民衆文化」に引きず
られ多くの人々が、両義性の陰の側面に秘められた、「民
衆の主題を通じてであるにもかかわらず、洗練された文人
をも巻き込む事の出来る、文学的遊戯乃至は〈言語学的挑
戦〉を提示する、不可欠の形式的前提」を介して、高尚な
精神価値を表現し得る〈歌〉の構造的特質が、見落とされ
てしまっていると言つ¹⁴。

その機微は彼女によれば、メデイチ側近の一人ピエロ・

ダ・ビツピエンナが、一四九〇年の謝肉祭に際しものした、
「我々は「指導者―弁護人」という仮面行列を催しました。
そして……沢山の端麗なるご婦人方と共に、ある一軒の美
しい邸宅に籠もっておりました。ロレンツォ様が第一の行
列のためにお作りになった数編の詩歌は……謝肉祭の「猥雑
なる」風俗を歌ったにもかかわらず、大変美しく、またそ
の〈創意〉は斬新で驚嘆に値します」なる書簡の、「反民
衆性」にも明らかに窺える¹⁵。だがロレンツォ公時代伝統
祝祭にエリート主義的要素が挿入され、その結果「トレッ
クスラーの言うのとは別の意味で―この時期フィレンツェ
の祝祭に、大きな性格変化が生じていたのは事実とは言え、
ロレンツォを中心に展開した当時の祝祭の性格を、ヴェン
トローネのようにエリート主義的性格の一面から、或いは
トレックスラーのように民衆文化的性格の一面からのみ、
一刀両断に定義する必要があるだろうか。寧ろロレンツォ
の〈歌〉の両義的特質を、その備える両義性そのままに、
掘り上げていく必要があるのではないか。そして我々はそ
のようなメデイチ政治文化の両義的性格が意外にも、当時
回家が現実政治の次元で担った、政治戦略の両義性を見事
に反映している事を知る事になるだろう。かかる観点に臆
気ながらも道筋をつける事こそ、本稿の主眼とする処に他

ならない¹⁵。

II

さてボナバルティズム国家が、大衆層の広汎な支持の獲得のため、権力の新たなプロバガンダの次元を開拓したのは周知の事実であるが、世に名高い一五世紀メデイチ家の政治文化、就中祝祭の特質もまた、政権のこのようなボナバルティズム的性格を通じて、理解できないだろうか¹⁶。当時の祝祭を伝える版画や長持ちの装飾画に窺えるように、ルネサンス国家の祝祭の刻印となるのが、ローマの凱旋式を意識した、古典古代風の山車の導入にある事は従来より指摘されてきた。時にかかる古代風の山車の導入を、メデイチ家の積極的創意の産物とする解釈も見られる程だ。そこで以下に、ロレンツォ公時代の祝祭における山車の問題を大凡整理しておきたい¹⁷。

中世以来のフィレンツェの伝統祝祭、わけでも聖ヨハネ祭において、山車の使用は決して事新しい現象ではなかった。聖ヨハネ祭は、都市と市民の装飾、俗人と聖職者の行列、聖人への大蠟燭の奉獻、優勝旗(パリオ)を賭けた「聖人の栄誉のための」競馬など、幾つかの行事を複合させた、この都最大の年中行事である。行列について言えば聖職者

のそれが、聖遺物の捧持を中心に置くのに対し、俗人のそれは古来より催事用の山車を機軸に展開した。ジュスト・ダンギアリの『覚書』は一四七〇年の行列につき、「フィレンツェにおいて、〈建造物〉と呼称される〈山車〉行列により、諸聖人についての多くの聖劇が催された。この〈山車〉は九台に及び、行列は第一六時に至るまで延々繰り広げられた」と証言しているが、聖ヨハネ祭の教会行事としての根本性格に相応しく、一四七〇年の時点においても山車の内容が、その上での聖劇の上演という民間信仰的性格を維持していた事は、注目されよう¹⁸。この時如何なる聖劇が上演されたかは、一四五四年の聖ヨハネ祭に関するマッテオ・パルミエーリの『年代記』の記述に詳しい。それによれば〈墮天使の墜落〉の山車を先頭に、天地創造と樂園追放を物語る〈アダムの〈建造物〉〉、〈十戒石〉の授与を語る〈モーゼの〈建造物〉〉、受胎告知劇のための〈告知の〈建造物〉〉、イエズス降誕をとりあげる〈御降誕の〈建造物〉〉など、新旧約聖書の物語を主題とする山車が、順次続いている。多くの研究者も指摘する如く、一四六五年のナポリ太子フェデリコの訪問をこの時期に設定した事に示されるように、政権奪取後大コジモは自身の外交政策の道具として、この祝祭をはじめ伝統祝祭を大

いに活用した節がある¹⁹⁾。

しかし多くの史料の証言するところによれば意外にも、一四五九年の教皇ピウス二世とミラノ公嗣ジャン・ガレアツォの入城式においてその精華を示す、コジモの伝統祝祭振興政策が、名高いロレンツォ豪華公の祝祭へと継承された訳ではないようだ²⁰⁾。寧ろ史料は一致してロレンツォがある時期まで、都市の伝統祝祭に敵対的態度をとった事を示唆している。リヌッチーニの『回想録』を引用してみたい。「市民達に名声と優美さを与え続けてきた、婚儀や舞踏、祝祭や華美な装束などの一切の事柄に、ロレンツォは損害を与え、言葉と行為の双方によってこれを駆逐しようとした」²¹⁾。奢侈禁令に代表される彼のこのような言動が、その青年期までの放縦な生活とも、晩年の謝肉祭の〈歌〉の民衆文化的性格とも矛盾する事は、従来より考察の対象とされてきた。トレックスラーはこれを成熟期に入った公の、己を真面目な人物と印象づけようとの欲求に由来する、文化意識におけるブルチ(民衆文化)からフィチーノ(エリート文化)への移行として理解するが、これは妥当な視点であろう。ここで祝祭を考察の素材とする我々にとり興味深いのは、ロレンツォの内面における文化意識にかかる変貌が生じつつあった時期が、フィレンツェ祝祭文化

の大きな断層と重複している点に違いあるまい²²⁾。

本稿冒頭にヴェントローネの所説を関し紹介した、権力継承当初の公の祝祭への無関心(史料の欠如という見解は、キャッペリやニュービギンのような、その他の研究者達においても共通の了解事項となっているようだ。一四六九年の彼自身の、そして一四七五年の弟ジュリアーノの、著名な馬上槍試合についてもキャッペリはこれを、先代よりの情性に促された不承不承のものと評するに過ぎない²³⁾。フィレンツェにおける伝統祝祭史上の断層―その決定的衰退が認められるのは、一四七八―一四八八年の「失われた十年」間である²⁴⁾。勿論聖ヨハネ祭を筆頭とする伝統祝祭は、教会暦に基づく年中行事であるから、その全てが廃止される事はなかった。だがビツピエンナの書簡が証言するようこの時期、聖ヨハネ祭が特にその山車を伴う俗人の行列という面において、大幅な縮小を蒙った事は間違いないようだ。この「失われた十年」の開幕を告げる一四七八年が、メデイチ独裁の危機を告げる、かのパッツィ陰謀事件の生じた年である事は言を俟たない。ジュスト・ダンギアリの『覚書』は一四七八年の祝祭の縮小の理由を、疫病の猖獗に帰しているが、それでも宗教行列や馬上槍試合、競馬といった行事が常の如く開催された一方で、俗人の(山車)

がまるで狙い撃ちにされたかのように、廃止に追い込まれた事は留意を要する²²⁾。通常言われる如く以後一〇年、政権維持のために行われた間断無き戦争が、傭兵隊雇用の必要を増大させ、国家財政を圧迫したのは確かである。「聖ヨハネ祭の競馬の錦織の購入や、先に論じた如き諸々の支出にあたって、可能な限り節約を加える事」(一四七八年五月一三日の政令記録²³⁾)。

当然ながら山車が狙い撃ちされたについては、理由を想定し得る。即ち、パッツィ陰謀事件後ローマ聖座と決裂した事により市が破門措置を受けた「この事態は、フィレンツェの人民には何とも面白からざるもの」であって、従来よりのロレンツォの中央集権的志向に対する不満と合俟ち、「市の教会への崇敬という自然な傾向故に……」「メデイチ政権が」この事態から多大な重荷を担わざるを得²⁴⁾「なかつたからである²⁵⁾。元々〈山車〉の製造は世俗的同信会や同職組合等、伝統的社会組織に委ねられてきたものだが、ロレンツォの教皇シクトゥス四世との衝突により、フィレンツェ市民間に生じた動揺を前にメデイチ政権は、当局の監視下に置き難い私的集会その他の反政府活動の温床として、このような組織に対し疑惑の念を強めざるを得無かつた。かかる抑圧とそれに伴う伝統祝祭の担い手の衰退は、一四

九一年の聖ヨハネ祭に関するトリバルト・ロッシの『日記』の、「聖ヨハネ祭前日の朝方、山車が賑々しく繰り出されたが……それらは大層無様なものであった」という記述からも瞥見できよう²⁶⁾。都市の筆頭行事である聖ヨハネ祭の山車にすら、抑圧が加えられる以上、その他の聖劇や祝祭行列を支えた、信心会への抑圧は言を俟たない。有名な〈三賢王礼拝会〉をはじめとする信心会は以後次第に、公的祝祭の挙行団体から、信心業の修養団体へと再編されてしまうこととなる²⁷⁾。

マキアヴェッリも指摘するように、危機の時代は一四八六年、サルツアーナ要塞がフィレンツェ軍の前に開城するまで続いた。「フィレンツェ人達は……一四九二年まで類似希な幸福の内にその生を送った。何故ならロレンツォ公は……自身と都を偉大にする事に、心血を注いからである」と彼の叙述は続くが、豪華公の薨去までのこの短日月こそ、メデイチ家主導下の、フィレンツェ祝祭文化の花の盛りとなった²⁸⁾。記録に残る限り一四九〇年の謝肉祭における、「七惑星の凱旋」と題される行列を皮切りにロレンツォは、伝統祝祭を全く新しい様式と意識により再編し振興した。「七惑星の凱旋」という主題から解される如く、その作詞になる〈歌〉を伴ったこの山車行列は最早、従来の山車の

様な中世キリスト教的趣味に支配されたものではなく、有名なパッチョ・バルデーニ作の『諸惑星』連作版画と同じく、主題においても装飾においても、古典古代の占星術的風格を備えるものであった(図一)^⑧。と同時に、先に記した様にこの出し物の演出は、メデイチ政權に抑圧され、衰退した伝統的社會組織ではなく、一四九一年のもう一つの凱旋行列―「パウルス・エミリウスの凱旋」に関する証言からも窺える如く、メデイチ家より直接依頼を受け、マリオ・タツツォの指導の下活動した新組織Ⅱ(「星」^{ステラ})組がこれを担当した。



図1 「七惑星の凱旋」

上部に星神(自身を象徴する動物に引かれた乗車の車輪には支配下の星座があしらわれる)。下部にはその徳性と関わる職業生活が描かれる。

III

この(「星」^{ステラ})組の性格につきヴェントローネが、そのメデイチ家との癒着を強調するトレックスラー説を、厳格な史料操作の見地から批判した事に関しても、既に瞥見した。しかし彼らの仕事になる「エミリウス・パウルスの凱旋」をトリバルト・ロッシが「ロレンツォ・デ・メデイチにより提供されたものである」とはっきり語っている以上、両者の宗属関係は疑問の余地がない。そして伝統的社會組織に対しメデイチ政權が抱いていた警戒心をも考え合わせれば、この新組織の担い手が、次代の(「力」^{フォルツァ})組に繼承される如く、こうした伝統的市民層と権利面に対立し、従来政治の闘技場の外野席に押しやられていた、日雇い職人の如き無産大衆^{ポロ・マスト}であった事は、高い蓋然性をもってはいまいか(こうした無産大衆との連携は先に論じた如く、早熟のボナバルティズム^{ボナ・マスト}国家としてのメデイチ政權にとり、必須の課題であった筈だ)。

そればかりではない。一四九〇年の謝肉祭は極めて多くの、注目すべき要素を孕んだ祝祭である。先に触れた様に占星術的主題が全面に打ち出され、それに伴い古典古代風と称される(凱旋車)が、フィレンツェの祝祭に初めて導

入された。それがバルディーニの版画の如く、純正な古典古代の凱旋車に漸近したものであるか、それぞれ固有の隨身衆に囲まれつつ、七頭の象徴的動物に牽引された凱旋車を御す、七柱の惑星神という構造を同じくするもの、ワールブルクの言う「フランス風古代」——中世特有の時代錯誤に満ちた外装（当時のフィレンツェ流の長持ちの裝飾画にかかる実例——それはベトラルカの『凱旋』の挿絵に端を発する——を多数実見し得る）に包まれたものであるかは、尚議論の余地がある（図2）^②。外装の問題と並び注目すべきは、「七惑星の凱旋」という主題そのものである。その性格においてこの行列は我々の連想を、一五世紀王朝プロバガンダの一つの頂点——フェラーラ、スキファノイア宮なる『四季の間』の占星術的主題へと引き寄せる（図3）^③。一四七三年、既にフェラーラにおいてエルコレ一世の主宰下、「七惑星の凱旋」行列が挙行されている。「失われた一〇年」の後、豪華公は今やフィレンツェ祝祭の市民的性格を超越し、古典古代文化のエリート主義的様式を媒介に、フェラーラやミラノの諸侯に匹敵する王朝的性格を、それに付与しようとしたかのようだ^④。

凱旋車に伴う古典古代様式の導入は、まず規範性の少ない謝肉祭という場において実現した。一方教会暦内の行事

として、よりキリスト教的色彩の濃い聖ヨハネ祭に、古典古代様式という新しい様式を導入し、これを都市共同体の祝祭からメデイチ権力の祝祭へと、いわば家産化するにあたってメデイチは、この祝祭が内包する空想上の古代的起源——古代の凱旋式と聖ヨハネ祭の母娘関係——を活用した。

例えば守護聖人へ奉獻する大蠟燭を乗せた（山車）に毎度、特赦を蒙った一二人の囚人が付き従ったが、これは古代の凱旋車に随伴した捕虜の行進に譬えられたし、競馬の優勝旗を顕示する山車は従前より（小凱旋車）と呼称されていた（図4）^⑤。こうした対比関係はフラヴィオ・ピオンドの『ローマの凱旋』に、最も明瞭に提示されている。詳細を論じる余裕はないがピオンドはこの著作に、古代の凱旋を活気づけた（卓）と聖ヨハネ祭の（山車）を対比させつつ、また異国の珍獣や芸人、小人や巨人の如き奇形の如き珍奇な見せ物、広場での猛獣狩りなど両者に共通した風俗に言及しつつ、前者を後者の実景により想像し、また前者の理想を後者の描写に應用する事を通じ、エリート文化的形象と民衆文化的形象の一大混合物を歌い上げる。こうした世界を我々の眼前に彷彿させてくれるのが、メデイチ宮なるベノツツォ・ゴツツォーリの傑作、『東方三賢王の礼拝』だ（図5）^⑥。メデイチによって達成された聖ヨハネ祭のこ



図2 ベトラルカ「凱旋」挿図

時代錯誤的な「フランス風古代」の典型例。

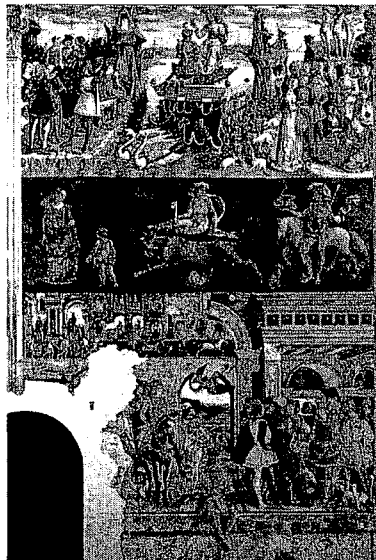


図3 スキファノイア宮
「四季の間」壁画

図1と同じく上段には自身を象徴する動物に引かせた車に乗る季節の神が、中段には当該季節に対応する星座の図像が、下段には当該季節を代表する労働が配される。

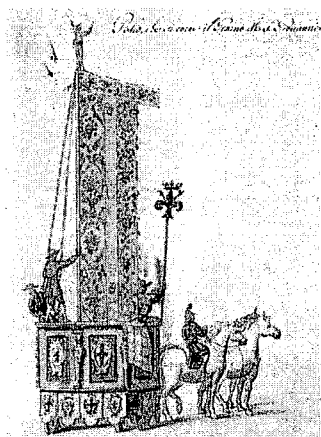


図4 小凱旋車

このような中世的建造物が古代の凱旋車と擬古的に混同された。



図5 「東方三賢人の礼拝」(部分)

祝祭に展開された民衆文化とエリート文化の混同に基づく、異国情緒の綺想の視覚化。

のような古代化の指標こそ、八九年の謝肉祭と並ぶロレンツォ時代を代表するもう一つの祝祭、九一年の「エミリウス・パウルスプロバザンテの凱旋」に他なるまい。そこに意図される効果プロバザンテが、単なる懐古趣味とは異なる、当代政治の宣伝的効果である事は、ヴェントローネの「主題は疑いなく政治的なものである。というのも、人民のために豊饒と平和の時代を打ち立てた、ローマの戦勝將軍の入城を祝しながら、それは同時に明白に、豪華公の統治の才に言及する事を、意図しているからに他ならない」という批評に示唆される通りであろう⁽⁵⁾。

さて、ロレンツォ豪華公治下の祝祭に関するこれらの情報を踏まえて我々は以下、本稿の結論へと、緩やかに論を進めて行こう。その治世も末年、八九年（「七惑星の凱旋」）と九一年の大祝祭（「エミリウス・パウルスの凱旋」）の挙行は、先に検討したように、伝統祝祭に概して好意的であった祖父大コジモと異なり、権力掌握当初からそれに対し厳しい態度をとってきたロレンツォの姿勢に、一つの変化が生じた兆しであった。かかる変化の兆しは以下の四点により特徴づけられる。(1)キリスト教的主題から古典古代的主题への移行、(2)中世民衆文化的山車のルネサンス宮廷文化的凱旋車への変容、(3)ロレンツォ周辺の文人

の参加による、仮面行列の〈歌〉の技法上の洗練（かかる形式上の洗練は、その暗喩内容の深化を伴う）、(4)祝祭の演出者が伝統的社會組織（同信会や同職組合）から、明白にメデイチ家の統制の下に置かれた、恐らくは無産階級ホボリニエリに出自する職人層により構成された、〈星〉組スター（後に〈力〉）組に委ね直された事……これらの特徴の秘める意味を解説する事、換言すれば、この時期における祝祭に対する公の態度の変化の真意を、上記の表面的特徴から解説する事が、本稿の着地点となる。この作業は更には、世に名高いロレンツォ豪華公の文化保護全体の、意図や特徴を見定める手掛かりをも提供しよう。

ロレンツォの祝祭政策におけるこの新たな時期が、ロレンツォの息女マッダレーナと教皇イノケンティウス八世の子息、フランチェスケット・チポーとの婚儀に端を発する事は、既に多くの研究者により指摘された処である⁽⁶⁾。この結果先代教皇シクトゥス四世以来の、メデイチ家とローマ聖座との対立関係が解消された事は、メデイチ権力の発展史上画期をなす出来事と言える。元来聖座の御用銀行家として、その権勢を躍進させたメデイチ家であるが、大コジモ治世の半ばより次第に、「榮譽と利潤」という当時盛んに用いられた対語に窺える如く、その収益の視点を商業

ビジネスから、政治ビジネスへと移行させはじめていた^⑧。こうしたメデイチ家のビジネス・スタイルの変化は、コジモがその銀行業務上の利益を犠牲にしてまで、長年のヴェネツィアとの同盟関係を破棄し、ミラノ公フランチェスコ・スフォルツァとの同盟関係を選択した事に端を発し、ロレンツォの嫡妻にフィレンツェ大市民階級からではなく一聖座に影響力を振るうローマ貴族、オルシニ二家の息女（クラリーチェ）を迎えた事により決定的なものとなった。ローマ貴族更には教皇自身と、商業ビジネス（利潤）を越えた癒着関係を形成し、聖座における政治ビジネス（米譽）の配分権を独占する事を介し、他のフィレンツェ大市民階級に対しメデイチ家は、内政的にも一段と優越した地位を占めることが可能となった^⑨。ここで強調しなければならぬのは、聖座を軸とした当時の国際社会において、同家の威信が高まれば高まる程、その国内的権力も強化されて行くという、関数関係が確立していた事であろう。こうした潮流は、早くも大コジモの末年にはメデイチ家の立場を、単なる「同等者中の第一人者」以上の位置に、押し上げる勢いを示していた。大コジモ没後、ルーカ・ピッツェイラメデイチは有力者にとって企てられた所謂「山岳党の乱」もまた、同家のかかる「市民生活の限界を超えた」、地位上

昇への危惧の念より生じたものに他ならない^⑩。ヴァローリによる（聖人伝）的ロレンツォ像に洗脳された我々にとり意外な事に、豪華公自身その晩年には権力集中政策故に、メデイチ派大市民層からすら長子ピエロ同様（僭主）との非難を蒙っていた事は、グイッチャルデイニの初期著作や、パレンティの史書の証言する処である。マキアヴェッリのフィレンツェ史などが分析する如く、元来メデイチ政権は、フィレンツェにおける大市民／平民間の権力抗争を奇貨として、後者の支援を背景としつつ、前者を適宜懐柔しながら成立したものであった。党派均衡により成立したかかる政権を類型化し、『君主論』第九章においてマキアヴェッリは、「市民的君主政」と名付けているが、コジモ・ロレンツォ体制下のメデイチ政権が、その代表的存在と目される事は、カドーニの論じる通りである。カドーニの所論が興味深いのは、第九章終結部においてマキアヴェッリの議論がそこに留まらず、かかる政体を超越した（絶対的）君主政の樹立の筈へと、突き進んでいると見る点であろう^⑪。即ち君主にそれだけの力量があれば、国家の抜本的再編という（危機的状態）において生じる、「市民的君主政」下の公吏（これは、旧来の都市共和政体の公職者を示すと考えられるが、（君主）との関係の不安

定性において、後期封建国家としての等族制国家における、名望家の機能と極めて近似する)と君主の利害の対立から後者は、かかる折衷的政体を超克し、当時のトルコ帝国に範をとり、君主に直屬する臣僚(セカク)(これはドイツ近世国制史における、所謂コミッサール型官僚に匹敵しよう)を媒介とした、(絶対的)支配体制へと移行すべきだと説くのである^①。

かかる(絶対的)支配を支える臣僚の姿は、後のコジモ一世における大公国官僚制として具体化されるが、先駆的形態はロレンツォ公の子ピエロの側近団に見出される。ピエロにおけるこうした傾向が突如出現した訳ではなく、その父ロレンツォの下、更にそれに先立つ萌芽が形成されていたと考えられる。マキアヴェッリの分析によればトルコの場合、君主のかかる孤独な支配の基盤は、イニエチエリ軍なる(自分の軍隊)(アルニプロウエ)に存したが、このような社会から遊離した基盤に依拠する事によって、トルコ皇帝は古代ローマ皇帝に比すべき、(暴君)たらざるを得ない。こうした欠陥を回避するには、従来の大市民(ダシイ)／平民(#)対立の外野に置かれていた、細民(ポロニエ)へとその支持基盤を転換する他無い。即ち先述の如く、その大衆迎合性において、君主国への成長途上にあつたメデイチ国家の性格を、早熟のボナパルティ

ズム国家と捉える事も可能と思われる。そして、本来のボナパルティズム国家が大衆動員を目指し、独特の(帝国の君主政)の政治プロバガンダ芸術を開花させたと同様、メデイチ国家もまたフィレンツェにおける、ローマ共和国とローマ帝国という、二つの政治的象徴を絡み合わせた起源神話の伝統上に、ロレンツォ豪華公の黄金時代の神話という、アウグストゥス黄金時代を再演する、独自の帝国の神話を織り上げて行く^②。フィレンツェ・ルネサンスの結晶としてのポッティチェリの『春』が、かかる(永遠回帰の神話)の具現である事は論を俟つまい。

この大衆性に支えられた(絶対的)支配体制という志向を踏まえる時、ロレンツォの祝祭における(星)組(ステッレ)の機能は、単に芸能史の限定された視点から、こうした所説の非実証性をあげつらう、ヴェントローネの批判にもかかわらず、極めて興味深いものがある。トレックスラーの主張によれば(星)組は、単に祝祭の演出方を取り仕切つたのみならず、街路を舞台に豪華公の(歌)を朗詠しつ、彼らの数の力を誇示し、ひいては彼らを庇護するメデイチ政權の安定性や權威を顕彰する、政治的機能を担うものであつた^③。その出版年代に議論はあるものの、バルトロメオ・デ・リブリの印刷による、『多数作者の作になる仮面行列



図6 『謝肉祭の《歌》』挿画

ロレンツォ豪華公(左端)と彼の「祭り仲間」の紐帯の傍証となる。

並びに謝肉祭の《歌》』扉の挿絵こそは、こうした路上での《歌》の朗詠の、今日に残る証言となろう(図6)④。
想起すべきは彼らこそが、古典作品の寓意に満ちた「七惑星の凱旋」や「パウルス・エミリウスの凱旋」の山車の制作に携わっていたという、事実である。祝祭の装飾物の制作に際しては、後代大公ゴジモ一世の側近に侍ったボルギーニの如き、博識の助言者が存在した事だろう。こうした助言者の指示の内容を、「パウルス・エミリウスの凱旋」

におけるマリオタツツオのような祝祭組の幹部や、グラナツチのような美術工房の親方衆は、ある程度理解できたのかもしれない。しかし末端で実践的作業に従事する組仲間の連中は、祝祭のこのようなエリート化を如何に捉えていたのか。

例えば九〇年の謝肉祭の七惑星という古典的テーマは、七星天を基礎に形作られた、伝統的なキリスト教宇宙論と上手く同化し得る主題であった。また先に述べたような聖ヨハネ祭の空想上の異教的根底は、山車に代わる凱旋車という新たな道具立ての導入を、遅滞なく推進する一助となった事だろう⑤。そもそもロレンツォ公治世末年の諸祝祭の古典化が、伝統祝祭の古典的純化をどこまで達成し得たかは、留保の余地がある。それはビネツリの言う通り、フラビオ・ビオンドの著作に窺える如く、当代フィレンツェ祝祭の描写と古代の祝祭の復原の緊張を媒介に、古典的性格への傾斜を強めつつも尚、美術史に言う《図像的無気力化》の定式に従って、一五世紀の種々の長持ちの装飾画の如き、民俗的な《フランス風古代》的特質を、維持し続けた筈だからだ⑥。それは例えば「エミリウス・パウルスの凱旋」において、この凱旋についての古代の記録には全く登場しない、「かのローマの《石》即ち尖塔」や「この凱旋車隊

を牽引する……四〇〜五〇組の去勢牛」等を巡る、奔放な空想が跳梁跋扈していた事からも、感得できる^⑦。総じて言えば一般の組仲間にあつては、古代の凱旋車の行列と伝統的祝祭の（山車）の慣習的行列とを、明瞭に区別する感性は存在しなかつた事と思われる。また祝祭のメッセージの発信者であるロレンツォ自身、マキアヴェツリの言う〈市民的君主政〉段階の君主のための、「自由な国家において現制度を改革しようとするものは、少なくとも旧制度の外見だけは残しておくべきである」という処方に答えるかの如く、無知な組仲間のかかる混同を積極的に操作・助長したに違いない^⑧。

このような機微はヴェントローネによつて、伝統的祝祭の一般観衆（外見上の指示物を（見る）人々）と、祝祭の内実の古典主義的変貌に積極的に関与したエリート知識人（実際の指示物を（読む）人々）の間に生じる断層を、メデイチ祝祭文化が乗り越えようとした事として強調された^⑨。先に触れた如くマキアヴェツリは確かに一方で、社会の抵抗を低減するため革新を目指す支配者が、伝統的様式の表面的保守に努めるべしと勸言しているが、他方革新を貫徹するために「反発という大きな危険を克服しつつ」「新君主は何もかも新しく編成し直すべきである」とも付け加え

る^⑩。結局この二つは現実には二者択一の方策ではなく、君主の置かれたそれぞれの事情において、適宜組み合わせながら用いらるべき方策であろう。こうした論理を踏まえて大コジモからロレンツォ豪華公末年に至る、メデイチ国家の祝祭史の方向性を概括すれば以下の如くなる。元來都市の市民勢力の均衡上、平民型〈市民的君主政〉として成立した大コジモ政権は、その関係上支持基盤である伝統的平民層の歓心を買うべく、伝統祝祭を積極的に振興した。一四五九年、教皇ピウス二世とミラノ公嗣ガレアツォ・マリーアの入城式において、華麗の頂点を極めた入城式は、大コジモのかかる伝統との融和的祝祭政策の、証左に他ならない。大コジモ、ピエロの後を受けロレンツォ公もかかる政策を踏襲した。一四六九年及び七五年の馬上槍試合がそれは、不承不承のものに過ぎなかつた。ロレンツォの祝祭に対する消極的な態度の背景には、既に大コジモ晩年より推進されたメデイチ家の、「市民生活の範疇を超越」し、都市における全面的独裁権を掌握しようとする改革志向が、旧市民層の反発を蒙つた結果、「かつてのような親しみ」を市民層から、享受できなくなつたことが考えられる^⑪。一四七八年のパツツイ陰謀事件と、それに伴つて生じた教会からの都市に対する聖務禁止措置は、先に挙げた

ロレンツォ当人の書簡が語るように、市民層のメデイチに対する反感を激化させると共に、政権側の市民に対する不信感をも掻き立てるものであった。その結果、反政府活動の温床たる社会結合の場である、伝統的祭仲間（同信会・同職組合）に対する抑圧や再編、ひいてはフィレンツェ祝祭史の（失われた一〇年）が招来された。

先述の如くこの（失われた一〇年）解消の契機となったのが、メデイチ家とチボー家（教皇イノケンティウス八世）の親族関係の形成であったと言える。これによりメデイチ家は一度は喪失したローマ聖座における（榮譽）の、フィレンツェに対する独占分配権を再建し、更には続く彼の次子ジョバンニの枢機卿昇進―未来を先取りして言えばその教皇レオ一〇世としての即位―を通じて、この分配権を一層強化することに成功した。対外関係のかかる安定は、内政面での自信の回復にもつながる。（星）組という直属集団を介してとはいえ、社会結合の過熱点としての伝統祝祭の再興に公が着手した事にも、教皇との親族関係の定立に伴う政権維持の自信が窺えよう。と同時に、教皇との親族関係の定立―嫡子ジョバンニの歳一四才にしての枢機卿位への昇進は、メデイチ家の身分を単なる一市民から、ミラノのスフォルツァ家やナポリのアラゴン家にも匹敵する、権

門へと押し上げる働きをも有していた。表面上ロレンツォの（歌）の猥雑さや、凱旋車の山車の性格に看取し得る、彼の祝祭の民衆文化的性格にもかかわらず、ロレンツォの祝祭がその本質においてローマやフェラーラの宮廷で先行的に展開された―宮廷文化的洗練という次元を、併せ持たねばならなかった事にも、当時のメデイチ家の西欧華胄界における、かかる立場が反映されている。完成された国民主権の理論を背景に確立した、真実のボナバルティズム国家においてさえその正統性は、新貴族制の創設やハプスブルク家との婚姻関係の模索など、旧制度の権威表象による補完を不可欠としたが、一四世紀末の公会議主義などに触発されつつ形成された、初期的国家主権理論―市民総会により樹立される大権機関にその可視的表現を見出す―に依拠するメデイチ絶対主義もまた、自身を叢生させた社会そのものみに自律的根拠を見出し得ず、常に外部の（普遍的）存在に、その正統性の根拠を依存せざるを得なかったのである。メデイチ都市祝祭の様式上の特色としての、雅俗混合様式もまた、自律的正統性の原動力としての大衆の動員と、外在的正統性の淵源としての普遍伝統的権威への参入という、矛盾する課題の視覚的解決という要求に即して生じたものに他ならなかった。

注

- (1) 拙稿「フュレンツェ 一五二四年の聖モントネ祭—ルネサンス祝祭における秩序と逸脱」『思想』八七六号、岩波書店、一九九七年、六三頁〜八四頁。
- (2) *Tutti i Torionfi, Carrì, Mascheate [sic] canti Carnascialeschi per Firenze. Dal tempo del Magnifico Lorenzo vecchio de' Medici, quando egli habbero pria cominciamento per infino a questo anno present 1559. Con due tavole, una dinanzi, e una dietro, da trovare agevolmente, e tosto ogni Canto, o Mascherata.* / In Firenze MDLVIII, (Lorenzo Torrentino), c. Ailrv.
- (3) N. Machiavelli, *Istorie fiorentine, Tutte le opere* a cura di M. Martelli, Firenze, 1992, p. 843.
- F. Guicciardini, *Storie fiorentine dal 1378 al 1509* a cura di R. Palmarocchi, Bari, 1931, p. 72.
- (4) P. Ventrone, "Il carnevale laurenziano", *La Toscana al tempo di Lorenzo il Magnifico—Politica Economia Cultura Arte. II*, a cura di R. Rubini, 1997, Firenze, pp. 418-423.
- (5) *ibid.*, p. 420.
- (6) *ibid.*, pp. 425-427. J. Heers, *Fête de fous et carnaval*, Paris, 1983, p. 280.
- (7) G. Ciappelli, "Il carnevale di Lorenzo: realtà e mito storiografico", *La Toscana al tempo di Lorenzo il Magnifico—Politica Economia Cultura Arte. III*, a cura di R. Rubini, pp. 918-922.
- (8) *ibid.*, pp. 919-922. R. C. Trexler, *Public Life in Renaissance Florence*, New York and London, 1980, pp. 400-418, 510-515. Ventrone, *op. cit.*, p. 423.
- (9) M. Martelli, *Studi Laurenziani*, Firenze, 1965, pp. 37-49.
- (10) T. de' Rossi, *Ricordanze, in Delizie degli eruditi toscani cit.*, XXIII, Firenze, 1786, pp. 270-271.
- (11) Ventrone, *op. cit.*, p. 424, pp. 922-923.
- (12) Ventrone, *op. cit.*, pp. 423-424. Ciappelli, *op. cit.*, p. 922, p. 924. Heers, *op. cit.*, p. 292.
- (13) Ventrone, *op. cit.*, pp. 427-428.
- (14) Martelli, *op. cit.*, p. 38.
- (15) 一五二一—二六世紀フュレンツェにおける祝祭の同義的性格の着目の重要性は、粗茶なかなどはあなが既に前提『思想』掲載拙稿六七頁〜六八頁でこれを、概念的に指摘しているのを参照せよ。
- (16) A. Pinelli, "Gli apparati festivi di Lorenzo il Magnifico", *La Toscana al tempo di Lorenzo il Magnifico*,

- (31) Pinelli, op. cit., p. 221.
- (32) Ventrone, op. cit., p. 428.
- (33) Pinelli, op. cit., pp. 224-225.
- (34) Pinelli, op. cit., pp. 225-228.
- (35) Pinelli, op. cit., p. 231. *Le temps revient. 'L tempo si trova. Feste e spettacoli nella Firenze di Lorenzo il Magnifico, Firenze, Palazzo Medici Riccardi, 8 aprile-30 giugno 1992*, catalogo a cura di Paola Ventrone, Milano, 1992, pp. 29-30.
- (36) Chiappelli, op. cit., p. 926, 930. Ventrone, op. cit., p. 430.
- (37) M. M. Bullard, *Lorenzo il Magnifico: image and anxiety, politics and finance*, Firenze, 1994, pp. 133-137.
- (38) *ibid.*, pp. 140-141.
- (39) フォレンツェ政治社会におけるメライチのこのような突出への反感をフォレンツォは、その二人の娘とフォレンツェ名門家系の青年の結婚により、回復しようとしようとする (*ibid.*, p. 140)。
- (40) G. Cadoni, "Intrno a due capitoli del «Frincipe»" in *Cultura* 9, 1971, p. 357.
- (41) 拙稿「マキアヴェッリ政治思想と〈自分と支配者〉」(comandar per se) 『北緯史学』五一号、二〇〇二年参照。
- (42) 近代絶対主義国家における〈ロミッサール型官僚〉の位置づけについては、C・シュミット『独裁』、未来社、一九九一年、五八頁〜九二頁に詳しい。
- (43) メライチ政治文化の表象における〈共和国／君主国〉の複合性については、『地中海学研究』XV 所収拙稿「ルネサンス後期の「君主論」政治プロバガンターヴァザリー《ロミッサー一世の戴冠》を解説する」、二二六〜二三〇頁参照。
- (44) Ventrone, op. cit., p. 423.
- (45) *ibid.*, p. 426.
- (46) *ibid.*, pp. 429-430. Pinelli, op. cit., pp. 223-228.
- (47) *ibid.*, pp. 221-222. F. Biond, *Roma triumphans*, Mantova (?) 1472: ed. consult. De *Roma triumphante libri decem, Venetis*: trad. ital. ca cura di Lucino Fauno, Roma trionfante, Venetia 15-44, p. 377.
- (48) *ibid.*, p. 222. T. de Rossi, op. cit., pp. 270-271.
- (49) Machiavelli, *Discorsi sopra prima deca di Tito Livio* (a cura di G. Inglese), Milano, 1996, p. 12.
- (50) Ventrone, op. cit., p. 429.
- (51) Machiavelli, op. cit., p. 121.

北陸史学会会則

一、本会は北陸史学会と称し、事務局を金沢大学文学部史学科内に置く。

二、本会は北陸地域を中心とし、広く一般に史学および歴史教育の振興、関係学会・機関との連絡、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

三、本会はその目的を達成するため左記の事業を行う。

- 1 会誌『北陸史学』の発行
- 2 学術講演会
- 3 研究発表会
- 4 講習会・講座
- 5 調査・見学
- 6 史料の蒐集ならびに刊行
- 7 その他必要な事業

四、本会は毎年一回総会を開く。

五、本会会員は普通会員・学生会員・賛助会員とする。

六、本会に会長一名・副会長若干名・常任委員若干名を置く。会長は本会を代表し、副会長はこれを助ける。常任委員のうち若干名は企画・編集・庶務の事務を分担し、会長はこれを総覧する。

七、本会に会計監査若干名を置く。

八、会長・副会長および常任委員は総会において会員の互選により選出する。会計監査は会員中より会長がこれを委嘱する。会長・常任委員および会計監査の任期は一年とする。但し重任を妨げない。

附則

一、常任委員会において必要と認められた時は臨時総会を開くことがある。

二、普通会員および学生会員は総会の承認を得た所定の会費を納めたもの、賛助会員は本会の目的に賛同し、常任委員会所定の特別会費を納めたものとする。なお、会費を滞納したものは退会させる場合がある。

三、本会則は総会または臨時総会において、出席会員の過半数の賛成により変更することができる。

(二〇〇二年一月二四日改正)

(付記)現在の会費は普通会員年間三〇〇〇円、学生会員(含院生)は半額です。